

都市アメニティの輪を広げる ニュースレター第4号

- 2 巻頭言
- 3 '10 建築学研修
- 4 '10 夏合宿
- 5
- 6 秋田大学浜岡研究室インタビュー
- 7 学科ニュース／新3年生紹介
- 8 informations / OB・OGの今

日本3大観音に数えられる赤田の大仏が納められている「長谷寺」(由利本荘市内) 写真：小笠原聡美

出張時の交通手段の四方山話

秋田空港から伊丹空港へと向かう早朝の便が無くなり、京都や大阪に出張する時は、午後一番からの用事であっても前泊するしかなくなりました。これは前日に夜遅くまで別の用事が埋まっている場合に大変不便です。寝台列車で行く方法もありますが、遊びの旅行なら楽しいものの、仕事ではパソコン等の盗難が心配で席を離れにくかったり、狭い空間で揺れながら身支度を行うのが割と不便だったりします。個室では経費がかかりすぎます。

それでより良い方法は無いものかと模索したら、新庄から山形新幹線で行くと言う方法が見つかりました。新庄から始発の山形新幹線に乗り、東京から東海道新幹線に乗り換えると、京都で午後1時から会議がある時も間にあいます。実は秋田新幹線でも間に合うのですが、山形新幹線を使う方が10分ほど早く到着でき、しかも3000円ほど安いのです。そこで経費を節約するためにも、最近では山形新幹線を使う機会が増えました。

秋田県内に住みながら山形新幹線の方が便利であることは、一見すると奇妙に聞こえますが、かつて本荘は関ヶ原合戦後に最上氏の勢力範囲であったこともあり、考えてみれば最上地方とも縁のある地域です。特に今後、新幹線が酒田経由で本荘に延びるようなことがあれば、県境に関係なく庄内地方や最上地方と経済的に融合していくのではないのでしょうか。

出張時の移動手段についての話に戻りますと、飛行機一辺倒から新幹線へとシフトしたことは、かなり新鮮な出来事でした。元々新幹線を愛用している人には当然の話ですが、まず荷物の制約がなく、次に電子機器の制約がなく、更には充電もできます。よって、移動時間だけを考えると飛行機に軍配が上がる場合も多いですが、移動中の有効的な時間利用を考えれば新幹線の方がはるかに便利なのが分かりました。

これから先、全国の新幹線網が完成したりリニア新幹線が開通したりしたら、所要時間の点でも飛行機の優位性が下がるかもしれません。今年の5月にヨーロッパで起きたアイスランドからの火山灰による混乱も飛行機の弱さを露呈しました。いずれ世界中が地下トンネル等を使ってリニア新幹線のネットワークで結ばれれば、飛行機は僻地へ行くための特別な乗り物となるでしょう。



浅野 耕一（あさの こういち）

都市づくりのセンターをつくりたい

I have a dream. この言葉は、アメリカ公民権運動を推し進めたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師が、1963年のワシントン大行進の際にスピーチで用いたものである。10数年前の夏、研究調査でアトランタに行った際にキング牧師の記念館に足をのばし、スピーチ全文を読んで崇高な精神に感激したことを思い出す。残念なことに彼は凶弾に倒れたが、彼はノーベル平和賞を受賞し、その夢は現実のものとなっている。

では、私の夢は？

まだ茫漠としているが、都市づくりのセンターをつくりたいという思いがある。センターといっても、外形にこだわるつもりはなく、拠点的な機構をつくるイメージである。あるいは、現実の都市づくりに影響を与える実働性あるネットワークと言ってもよい。

秋田の地に赴任して3年半。まだ期間は短いものの、この地の豊かさや、人口減少や経済活動の低迷などの厳しい現実の両面を見てきた。都市・建築というPhysical Planningに係る研究や実務のみでは、後段の厳しさを解決することはできないものではないが、地域再生の一端を担うことは我々に課せられた使命の一つと考える。人口減少が極端に進む秋田において、持続性を確保した都市づくりを実現しうる都市構造や土地・建物利用像は未だ明確に描ききれていない。散在的に展開されている市民まちづくり活動が、如何にそうしたものに係わっていくかの道筋も明らかではない。だが確かなことは、市民、行政、大学等がそれぞれの立場から模索していることである。そして、それらを統合していく仕組み・機構が必要だということである。我々は、こうした機構を生み出す契機の一つを担い、それが実現したあかつきには主要構成員として活動したいと思うのである。

都市アメニティ研究室において、研究・教育活動のみならず現実の社会との接点を求めて活動してきたことは、赴任直後からこんな思いが私の中に芽生えていたからだろう。実際、研究成果を広く公開する卒業・修了展は研究室の恒例となり、今年の夏季集中研究は調査・研究のみならず建物の修復という実際の作業も取り入れて実施した。夢の実現に向け、小さな実績を積み上げているわけである。その延長線上に、そしてそう遠くない時期に、秋田における都市づくりのセンターをつくる。それが私のdreamと言っていだろう。



山口 邦雄（やまぐち くにお）

建築学研修

2010年8月2日、9期生の建築学研修報告会がありました。
都市アメニティ工学研究室全員のタイトルと、代表者2名の研究概要を紹介します。

- 9期生の建築学研修のタイトル -

- 加藤 辰彦 街なみ環境整備事業において住宅修景の促進に影響を与える要因の研究
-東北地方7地区の調査より-
- 小玉 彩子 災害対応を考慮した自治体平常業務における時空間GISの利用促進
~消防事務と生活環境管理への応用~
- 篠原 美由希 実施調査を通じた日常生活で徒歩を愛好する誘因に関する一考察

- 菅原 功子 認定こども園における地域への子育て支援サービスにかかる建築的対応
-子育て相談スペースに注目した秋田県内での調査より-
- 鈴木 結花 建築家とエンジニアによる共同設計の普及に関する研究
~東北地方の建築家を対象としたアンケート調査結果に対する考察~

地方都市における交通施設の立地に着目した 歴史的市街地の拡大に関する研究 -由利本荘市本荘地区を対象として-

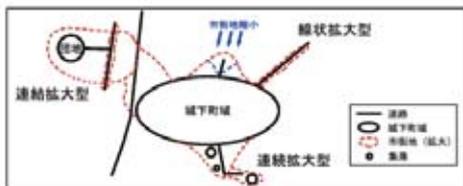
B09C010 金子 佑

・研究の背景と目的

近年、地域の固有性や住民のわが町に対する意識が高まり、各都市で独自のまちづくりや対策が行われている。

そのような現在のまちづくりの目標像は、日本の多くの都市が基盤とする城下町の構造によく似ている。しかし、その構造は鉄道の導入や道路形成といった都市の近代化が進むにつれて変化を遂げ、様々な問題を抱えることになる。特に地方都市では市街地の拡大が問題となっている。城下町を基盤とした都市の計画を考える上で、どのような経緯で現在の都市の形になったのかを考えることは重要である。

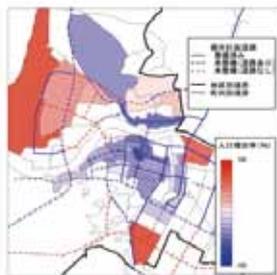
以上のことから、本研修では城下町を基盤とした「由利本荘市本荘地区」を対象に、交通施設が立地することで歴史的市街地がどのような拡大を遂げてきたかを考察し、今後の都市計画のための基礎資料を得ることを目的とする。



左：市街地拡大のパターン

・考察とまとめ

本研修において本荘の市街地の拡大を交通施設の立地に着目し、各時期で整理した結果、3パターンに分類することができた。都市計画道路の整備状況と人口動態との関連からは、今までは人口増加に伴う市街地の拡大が見られたが、城下町域から拡大した地域において、今後は道路の整備が行われないなどの条件の悪い地域から低密化が進み、変化の質が変わることを予感させる結果となった。



下：道路整備状況と人口増減の関係

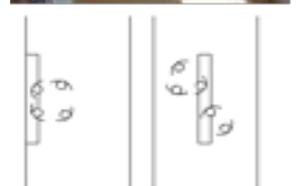
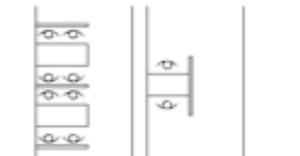
MI理論に基づいた小学校の教育 学習環境に関する一考察

B09C042 渡邊 豊

・研究の背景と目的

現在、海外では多重知能理論（以下MI理論）という人間の知性を多元的なものとして捉える理論をもとに、時間割を廃止し徹底した個別化教育を試みる事例も見られる。画一的な教育からの脱却を模索しようとする動きが見られる我が国においても、MI理論に基づく教育法が有効であることに言及し授業方法の改善を提案した研究もなされている。

そこで、MI理論に基づく学校改革を行ったデンマークの「学校開発・発展プロジェクト」(SKUB)によって新設された学校に着目し、MI理論に基づく教育・学習環境を整備した学校を計画するために、その教育上の特徴から必要となる空間を確認することを目的とする。



・考察とまとめ

日本の先進的な小学校とMI理論に基づく小学校との違いとして、個別学習スペースの量や内部空間構成に違いが見られた。日本の学校は、広いスペースに腰掛ける場所が用意されているなど、多目的な居場所の取り方をしており、SKUBでは机に向かう学習を主な目的とした居場所のとり方が多くなされていた（上図・右図）。本研修ではMI理論をベースとした教育方法や学校建築の特徴を整理し、日本の学校建築と比較することで、多様性を持つ空間の導入方法について知見を得た。

'10 ゼミ合宿 in 鹿角

夏季集中研究（ゼミ合宿）とは、実際の都市及び建築を素材に計画やまちづくりについて集中的に調査・研究を実施し、知見を広めることを目的とした活動で、今年で4回目を数えます。

今回は、秋田県鹿角市花輪で明治期の伝統的商家（関善酒店）を活用したまちづくり活動を行っている、NPO「関善賑わい屋敷」にご協力いただき、9月2～3日に花輪地区や関善酒店の現地調査、10月3日に研究成果をまとめた地域発表会を実施しました。建築計画研究室からの参加も含め、総勢22名（院生6、学部16）の学生が、まち環境班、屋敷活用班の2つに分かれ、フィールドワークや住民ヒアリング調査等を行い、地域のまちづくり資源となる建物や場所の洗い出し、活性化に向けての課題を検討しました。

まち環境班

大町グループ



◆資料館◆

現在、資料館として使われている旧公会堂には、資料館の機能に、絵本ギャラリーとしての機能を追加します。さらに、前庭に簡易な遊具を配置することで、旧公会堂周辺が子どもたちの活気で溢れるよう提案します。



◆ポケットパーク◆

ポケットパークの新しさと、かづの銘酒の風情ある佇まいを植栽で繋げ、一体感のある景観にします。また、1階部分は仮設のカフェを設置し、休憩できるにぎやかな場所とします。



◆水車石畳◆

水車を設置したイメージです。植栽への散水が可能になります。また、夜間ライトアップ用の電力供給も考えられます。大堰沿いの景観向上を目的に、かづの銘酒壁面を木製の覆いで保護します。通りは、石畳とし、手すりのデザインを木製で統一しました。

六日町グループ



◆シャッターアート◆

シャッターに絵を描くことで華やかになると考えます。シャッターアートにより空間が明るくなり、さらに花輪ゆかりの漫画家（高橋陽一氏、やくみつる氏）に描いてもらった場合は話題性があるので新たな層の観光客の呼び込みにも繋がります。

◆定期市場◆

定期市場は市以外の利用像が課題でした。そこで、日中はイスや案内板、掲示板を設置し交流の場として利用してもらい、夜は仮設の飲み屋街を形成（月2回程度）するという提案を行いました。この提案により、市以外の利用が増えると考えます。



屋敷活用班

屋敷グループ



現在は、部屋全体に展示物が配置されていますが、この展示物の配置を工夫し、コンセプトをもって配置すること、展示物にキャプションを付けることにより、展示空間の雰囲気作りと見やすい展示を目指します。



多くの地元住民に閑善屋敷を利用してもらうために、土間を改築しスペースを設け、料理教室や手芸、生花などの教室を開催します。定期的に教室を開催することで、交流の場としての利用と新たな活動資金の確保が期待できます。



閑善屋敷をより多くの人に知ってもらうために工房を開店することで、地域の新たな魅力の場、地域の拠点を目指します。上の図は、藍染工房として開店したことを想定し、こみせの下に藍染作品を展示したイメージです。

1～2年

3～5年

5年以降

奥蔵グループ



蔵を本来の姿に戻し、蔵を知るきっかけを造るため、オークション等で奥蔵内の展示の整備、修復体験と広報活動を行います。さらに、奥蔵への通路には玉砂利を敷き小道を用意し、入口に簡単な案内板とのれんの設置します。



庭と外観の修復、内部の整理を終えた奥蔵利用し、ビアガーデンや上映会など四季に応じたイベントを開催します。修復体験や広報活動で得た協力者やイベントでの資金を改修に役立てます。



井戸の改修や奥蔵までの通路を設け、奥蔵と庭を酒造りが行われていた当時の空間の良さを活かした景観に整備します。さらに朝市会場から閑善屋敷に歩道を設置し、一体感のあるまちの姿を創り出します。



サイン計画

サイン計画は、現地調査やヒアリングを通して現状分析を行い「まち全体にまとまりを生み出す」「地域性の放出」を主軸に提案をしました。具体的には、サインのデザイン統一や地域名物の要素を取り入れる等です。設置に関しては、観光客にスポットをあて鹿角花輪駅・道の駅あんたらあを案内の始点とし、実際に自ら歩いてサインが必要であると感じたポイントを選定しました。

デザインは、案内板としての役割の他に、更新可能なスペースを設け地域の催しもの等の告知板としても機能するよう配慮し、名物の花輪ばやしや閑善酒

店の趣きある建物のモチーフをデザインに取り入れ、「花輪らしいサイン」を目指しました。



浜岡先生インタビュー

今回、都市アメ研では他大学の類似分野の研究室についての紹介記事をスタートします！

記念すべき第一回目は秋田大学・交通工学専攻の浜岡研究室です。



菅原「現在着手している研究はどのようなものがありますか？」

浜岡「そうですね。みなさんラウンドアバウトは知っていますか？これは新しい形の交差点のことを言うのですが、それに関する研究を行っています。ラウンドアバウトの例ではないけれど、



例えば、パリの凱旋門だと周りをぐるーっと囲んだ交差点がありますよね。ラウンドアバウトはそういった円形をした交差点のことを言います。1990年あたりから、ラウンドアバウトが提案され始めてイギリス、アメリカ、ドイツなどで導入されています。」

菅原「そのラウンドアバウトはどういった効果があるのでしょうか？」

浜岡「ラウンドアバウトは、非常に安全性が高く交通事故が少ないというのが特徴です。日本では十字の交差点が一般的だよね。見通しが悪かったり、安全確認を怠ってしまうと大きな事故になってしまう恐れがあるけれど、ラウンドアバウトだとそもそも直接ぶつかることが無くなるんです。」

菅原「日本での設置事例はありますか？」

浜岡「なかなか無いんですよ。でも11月はじめに長野県で社会実験が行われます。」

菅原「県立大学本荘キャンパスにも、似たような形がありますか？」

浜岡「それは、ロータリー交差点ですね。ラウンドアバウトは車を上手く処理するシステムなので、交差点内で車の停車はしてはいけません。ロータリーだと乗り降りして停車するでしょ？そ

こが違いますね。信号機を設置するよりラウンドアバウトにする方が環境にもいいですよ。」

菅原「なるほど。環境にも配慮出来るシステムはいいですね。この他にもありますか？」

浜岡「あとは、自転車に関する研究があります。実は、交差点での自転車と自動車の接触事故の大半は、自動車の運転手から見て左側からの進入によるものなんです。右側からの進入に対しては注意が向くのですが、それに気を取られ過ぎてしまうと左側からの自転車の進入に気付かずに事故に至ってしまうケースが多い。建物があれば尚更です。それで、この問題をなんとかしたいと研究を始めました。」



菅原「このような研究に取り組まれるようになったきっかけは何でしょうか？」

浜岡「こういう研究って、役所じゃなかなかできなくて、それこそ大学の研究室とか民間の企業じゃないかなって思うんですね。ただ民間の企業だと何か目的があって行っているわけで、少し方向性が狭まってしまうから。秋田じゃなくても、自分の研究を実践して、事故が減ったら嬉しいですよ。そして環境にも優しくなったりすると、非常にやって良かったなって思います。」

浜岡 秀勝 (はまおか ひでかつ)

秋田大学大学院工学資源研究科 准教授

<http://www.hwe.ce.akita-u.ac.jp/hamaoka/>



菅野先生が准教授に！！

都市アメ研・前助教の菅野先生が10月より構造学講座准教授に就任されました。これを記念して、卒業生へのメッセージとこれからの抱負を語っていただきました。

今朝(10/20)の秋田の気温は7度。通勤途中の景色は、短い秋の終わりを告げているように感じます。今年もまた秋田に冬がやってきます。私が秋田県立大に赴任したのは2001年4月でしたので、今年で10回目の冬を迎えます。このような節目の年に、准教授として新たな出発ができることを非常にうれしく思うとともに、卒業生・学生諸君含め関係各所の皆さんに感謝申し上げます。

私が都市アメ研に赴任した時は、開学3年目で研究室はまだ学生が誰もいない「空き部屋」でした。ここから一体何が始まるのか、期待と不安に胸を膨らませていました。1年して1期生が研究室に配属すると、「空き部屋」は瞬く間に学生の活気と生活感で溢れ、そこからは光陰矢の如く現在に至ったと感じています。振り返ればあっという間の10年で、皆さんと行った実験やゼミは今でも最近のことのように感じます。

赴任当時から学生の皆さんに伝えたかったこと…。改めて振り返って考えてみると、それは、私の座右の銘「日進月歩。まずは一歩進んでみる」ということだと思います。勉強や趣味、仕事等どんなことでも自らとことん考え抜いてみることの大切さと、失敗を恐れ

ずに一歩前進する気持ちをこれからも伝えていきたいと考えています。学生の皆さんには学生時代のうちに失敗して、反省する(後悔ではなく、失敗の原因を考え抜く)ことをたくさん経験してもらいたいです。考え抜く過程ではたくさんの人の意見を聞くことも大切です。友人や諸先生方などたくさんの人に相談して、多くの生の意見に耳を傾けてほしいと思います。もちろん私にも相談に来て下さい。私も皆さんの相談相手として信頼されるように自分を磨いていきたいと思えますし、私が皆さんに相談をすることもあると思えます。その時はどうぞよろしくお願いいたします。

真面目な文章を書いてしまいました…。都市アメ研での思い出(伝説?)も語りたかったのですが、また別の機会にしたいと思います。最後に10月より部屋が学部棟4階(GI409)に移りました。卒業生の皆さん、来学の際は是非お立ち寄り下さい。



菅野 秀人

新しあめメンバー

研究室に10期生が加わりました！
みなさんよろしくお願いします。

- ・誕生日
- ・出身高校
- ・好きなもの
- ・嫌いなもの
- ・今後の抱負

伊藤 正太

- ・1989年8月26日
- ・宮城県立仙台向山高校
- ・グミ、音楽、アニメ
- ・ピータン
- ・先輩のノリについていく！
かつおを引き立てる！



大塚 洸

- ・1990年1月4日
- ・静岡県立吉原高校
- ・マンガ、アニメ絵
- ・キノコ、レーズン
- ・常に高い誇りを持ち、
日々努力を怠らずに
生活していきたい。



小笠原 聡美

- ・1989年4月19日
- ・岩手県立花巻南高校
- ・雑貨、家具、お惣菜
- ・生クリーム、
素早いもの(特に虫)
- ・積極的に行動する！
いっぱい挑戦する。



北山 絵梨奈

- ・1989年11月27日
- ・青森県立弘前学院聖愛高校
- ・キラキラ、ページュ、アイス
- ・部屋の汚れ、オレンジ、
クラムチャウダー
- ・たくさんの建築・美術を見て
感性を磨きたいです。



木村 洋子

- ・1989年7月4日
- ・青森県立戸山高校
- ・カラメルソース
- ・この世の全ての虫、肩こり
- ・楽しくやり過ぎず！
てへー(笑)

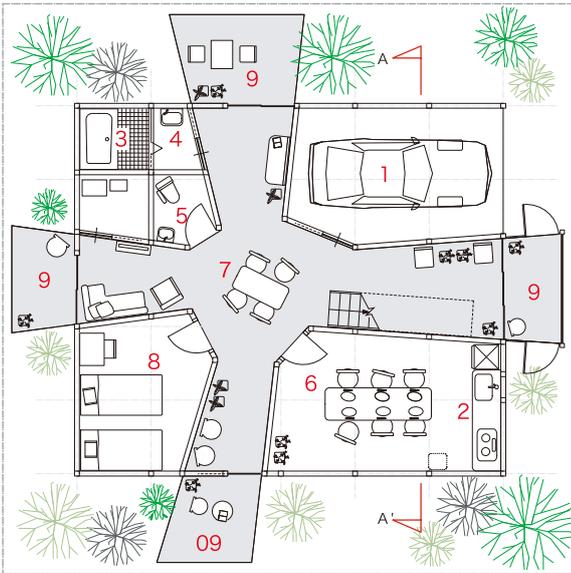


佐藤 直樹

- ・1989年11月2日
- ・福島県立福島東高校
- ・イチゴ、青、冬
- ・梅干し、ミルクティー
- ・忘れ物をしない！
物を失くさない！



小熊耕平、菅原功子、渡辺豊の三名による共同作品
「集いの家」が一等を受賞しました。



1.ガレージ 2.キッチン 3.浴室 4.脱衣室 1階平面図
5.トイレ 6.ダイニング 7.リビング 8.祖父母寝室 9.庭

調和を重んじる日本人としての家族の在り方を考え、多世代家族が同居する住宅を設計した。屋外の景色、通り抜ける風そこに住まう人達。それらは十字のアプローチの中心に集い広がってゆく。好きな時間に好きな場所で過ごせる共有スペースとなる。若い世代と老夫婦世代が共に生活するには、互いの生活に緩やかな距離が必要である。時には一緒に、時には別々に過ごすことができる家を目指した。



～受賞者の声～

Oさんのおかげで提出どころか一等まで取れました！！ (渡辺)

外観にひと工夫あれば。(小熊)

感謝です！！ (菅原)



断面図

第4回の報告者は 2期生 中村 友美さん



みなさん、こんにちは。都市アムニティ工学講座2期生の中村友美です。今回、このような場でメッセージを配信でき大変嬉しく思います。

早いもので大学を卒業し6年がたちました。卒業後、就職しました設備の工事会社に現在も勤めています。大学時代に主に勉強していた、意匠・構造等とは少し違い、建物に必要な空調や水等の設備に関わる仕事をしています。入社後、設計部に1年、その後約4年半の現場勤務を経験しました。現場勤務は、朝も早く辛い事も多かったですが、自分の中で貴重な経験を得る事ができました。現在は再び設計部に所属し、空調・換気・給排水関係の設計計算・設計図の作図・見積等を行う毎日です。毎日が忙しく過ぎていきますが、振り返ってみると色々な経験ができた6年間だったと思います。

大学時代を振り返ると、当時は設計課題や卒論等で作業が深夜に及ぶ事もあり、辛いと思っていた事も多くあったと思います。しかし、そのような思い出よりも様々なことに取り組み、学科の友人や研究室の友人達と多くの時間を共有できたことが良い思い出として残っています。現在も当時の友人達とは、それぞれの仕事の分野は違いますが、互いに刺激を受けることができる良い友人となっています。

社会に出ると学生時代とは、周囲の環境が大きく変わります。例えば、周囲の人の見る目が厳しく感じたり、自分自身に対して求められる事も変わっていきたりします。また自分が思っている以上に、やりたい事をやれる時間が少なくなっていく。仕事の上でも、図面の締め切り等の時間制限もありますが、本来の業務だけではなく業務に必要な資格の取得も求められてきます。今後社会に出る皆様は、まず時間を上手く使うことを覚えてください。趣味でも仕事でも自分のやりたいことがやれるように優先順位を決めて時間の使い方をしっかり考えて行動してください。そして最後に行動を起こすタイミングを間違えずに動いてください。

編集後記

新しい3年生も配属され、ニュースレターの編集委員もいよいよ3代目となりました。今号より、表紙のデザインコンテストや、他大学の研究室のインタビュー記事など新しい試みも増え、卒業生以外にも楽しんでいただける内容に深化しつつあります。

2010.10.31 NL編集委員

菅原 功子 佐藤 直樹 小笠原 聡美 小川 宏樹



UAEL 編集部
〒015-0055

秋田県由利本荘市土谷字海老ノ口84-4
秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科
電話：0184-27-2061 mail: wogawa@akita-pu.ac.jp
担当 小川 宏樹